

フィリピン先住民との連帯をめざして——国際連帯部報告

部落解放同盟広島県連合会国際連帯部事務局長 青木秀男

昨年一月にマニラで、先住民・マイノリティの国際会議があり、参加しました。そこで、一三ヶ国の先住民の活動家が、差別や土地収奪、生活解体、政治的弾圧の現状とその闘いについて報告をしました。私は、活動家たちの熱弁に感動しましたが、合わせて、報告から次のことを知りました。今、世界のあちこちの国で、国際資本が最後の「フロンティア」に侵入し、自然資源を収奪しています（ダム、鉱山など）。そして、周辺地域から住民を追い出し、抵抗する住民を政府が軍隊を使って弾圧しています。フロンティアとは、資本にとっての「未開拓地」のことであり、資本は、その開発によって莫大な利潤を上げています。他方で、周辺住民が生活を解体され、自然を奪われ、土地を追われています。資本主義は、今、地球の地表の最後の部分を利潤の草刈り場に使っています。その最後の地表に住み、収奪の犠牲にされ、迫害の的にされている人たちが、これが先住民なのです。

悲劇は、フィリピンでも起きています。フィリピンには、一一〇部族の先住民（人口の一五パーセント、一五〇〇万人）がいます。マニラがあるルソン島の北部のコルディレラ（七部族、一五〇万人の居住地）では、国際資本によってダムが建設され、河川流域の住民が排除されています。フィリピン最南端のミンダナオ（一五部族で総称してルマド、二五〇万人の居住地）では、国際資本によって鉱物資源が採取され、鉱山周辺の住民が排除されています。先住民は、もともとフィリピンでもっとも貧しく、国民国家から除外されて市民権が保障されず、国づくりの埒外に置かれてきた人たちです。今、それに国際資本の収奪と排除が加わっています。政府が法を作って、土地接収の先導役をしています。その結果、先住民の一部の人たちが、難民になって国内を流浪するまでに、事態は窮迫しています。先住民は、土地を守り、生活を守るために、果敢に闘っています。それに対して政府は、軍隊を送り、武装自警団を使って、活動家を殺害するなど、先住民の闘いを弾圧しています。今、弾圧はルマドの人たちに集中しています。二〇一〇年にアキノ政権が発足して以来、五六人の活動家が殺害されました（一五人のコルディレラの活動家も、殺害されています）。二五〇人が拘引されて、拷問を受けています。四万人が強制退去を受けて、難民になっています。さらに、住民やNGOがつくった八七の学校が、軍の駐屯所として接収されています。

ここで二点、指摘したいと思います。一つは、先住民の土地収奪や生活破壊に、日本の資本が加担しているということです。ルソン島では、ダム開発に電力会社が出資しています。ミンダナオでは、金属工業会社が、（現地法人を介して）ニッケル鉱山を運営しています。他方で、安倍政権になって、自衛隊が、フィリピン軍と合同演習を始めました。そして軍用機ほか、武器の供与を行っています。フィリピンでは、それに対する反対運動が起きています（私たちは、その事実さえ知りません）。将来、自衛隊が、先住民を殺害する事態が起き

ないとも限りません。私たちは、日本の資本が先住民を排除して資源を収奪し、自衛隊がフィリピンへ進出していることを許しています。私たちは、この責を免れることはできません。私たちの反戦争法の闘いは、そのような想像力をもつべきです。

次に、先住民は、過酷な状況の中で、どうして自分たちがそんな目にあうのかを問うています。そして、収奪や弾圧と闘う中で「敵」を知り、逆境と闘う先住民としての自覚を高めています。土地を守り、生活を守る。これこそ部族マイノリティとして、また、人間として尊厳を取り戻す基本なのだと断言しています。冒頭の国際会議の後、エイペック（アジア太平洋経済協力）に抗議するデモ行進の先頭で、先住民の人たちも、目を輝かせて怒りの拳をふり上げました。今、先住民の闘いは、全国の先住民運動のうねりとなって、また、そこから世界のマイノリティ運動へ合流しています。そのために、コルディレラやルマドの人たちは、枯野に火を放つごとく、運動の裾野を広げています。

他方で、日本の広島で、部落解放同盟広島県連合会が、国際連帯部を立ち上げました。広島県連は、部落解放運動の基軸の一つにアイヌ、在日朝鮮人との連帯を果すという、誇らしい歴史を持っています。その上での、この度の国際連帯部です。解放同盟の方たちの知見に、心より敬意を表します。私もぜひお手伝いさせていただきます。ではなぜ今、あらためて国際連帯なのでしょう。理由は2つあると思います。

一つは、闘う「敵」が同じだからです。先住民は反帝国主義といい、私たちは反ネオリベといい、先住民は反軍事化を闘い、私たちは反戦争法を闘っています。先住民は反植民地主義、つまり反権威・差別といい、私たちは反差別といい、現代世界にあって、両者の「敵」はグローバルに繋がっています。ゆえに闘いも、国境を越えて繋がるべきです。

二つは、闘いの経験を学びあうためです。部落解放運動は、水平社以来の崇高な人間解放の思想を持っています。その思想と運動の正義を、世界にしっかり伝えるべきだと思います。また、過酷な状況の中で闘う先住民運動から、運動の原点を学んでいいと思います。被差別部落民は、先住民ではありません。差別の歴史も仕組みも違います。しかし、被差別部落民も差別され、人間の尊厳を冒されかねないリスクを負わされています。いかに境遇も闘う方法も違おうと、マイノリティとして、ともに人間解放をめざす存在なのです。部落解放運動が国際連帯の道を切り拓くことは、運動の必然だと思います。

このような考えに立って、国際連帯部は、今、(まずは)「コルディレラ人民同盟」および「ミンダナオ先住民同盟」と連帯の道を開きつつあります。昨年暮れに、ルマドの人たちは、人権侵害と活動家の殺害に抗議して、ミンダナオからマニラの大統領府に向けて行進を行いました。国際連帯部は、その行進に連帯と激励のメッセージを送りました。年頭には、コルディレラとミンダナオの両組織に連帯のメッセージを送りました。いずれも先方から、熱い連帯のメッセージを受けました。四月には、コルディレラの山中で全部族が集まり、交流する決起集会があります。それに、国際連帯部として参加する予定でいます。国際連帯部と先住民運動の連帯活動は、始まったばかりです。たがいの信頼を深め、闘いの経験と思想の交流を深め、学びあい、励ましあう。そのために、一歩ずつ、地道で

持続的な活動をめざします。それは、広島の部落解放運動が世界のマイノリティ運動に合流する序章ともなるはずです。また内では、そのような国際連帯部の活動を部落解放運動を担う若者が継いでくれることを願います。そのためにも、国際連帯部の活動を、着実に進めていきたいと思えます。

ある日、コルディレラの活動家に、身の危険を心配して言葉をかけました。彼がこう答えました。「死ぬことを恐れないし、悲しみません。僕の後ろには深い人民の海があります。若者が、次つぎと僕の死を乗り越えていきます。」彼もナイフで首を切られそうになり、かろうじて難を逃れた人です。彼の死を恐れぬ勇気はもちろん、民衆とともにあることにすべてを賭けた素晴らしい思想に脱帽でした。勇気は、民衆への信頼から生れるのです。